

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 たなかきみあき
田中公明

日本における曼荼羅研究は、平安時代初期の両界曼荼羅の伝来以降、およそ1200年の歴史をもつ。1960年代からは佐和、高田、柳澤、石田、頼富、立川氏らによる研究が公にされ、とくに石田尚豊氏の『曼荼羅の研究』(1975)は、日本伝来の両界曼荼羅に関する最も重要な成果といえる。これに対して本論文は、従来の研究が視野に収めえなかった曼荼羅誕生の地インドに目を向け、同地で5～6世紀頃に原形が現れてからインド仏教の衰退期に登場した『時輪タントラ』(10世紀末～11世紀前半)に至るまでの、およそ600年に及ぶ曼荼羅の成立と発展の歴史を解明することを目的とする。

第1部「研究篇」の第1章「曼荼羅の成立」は、古代から礼拝像に見られた三尊形式が曼荼羅の原初形態へと発展し、鳥瞰的な風景描写を伴った礼拝用の仏画から、幾何学的なパターンをもった曼荼羅が出現するまでのプロセスを解明する。釈迦・観音・金剛手の三尊形式から、さまざまな試行錯誤をへてたどり着いた到達点が『大日経』所説の胎蔵曼荼羅であること(第2章)、これに対して金剛界曼荼羅は、新たに五元論の体系を導入した画期的な構成をもつことを、氏は歴史的、図像学的な視点から明かにする(第3、第4章)。

とくに従来から議論があった『理趣経』と『金剛頂経』の成立の先後関係について、田中氏は文献と図像の両面から、前者の『理趣経』系曼荼羅の発展によって金剛界曼荼羅が成立したとする結論を導いている。第5章では後期密教時代の曼荼羅理論を確立した『秘密集会タントラ』とその曼荼羅を、聖者流・ジニャーナパーダ流の二大解釈学派を中心に考察する。第6章「母タントラの曼荼羅」は、従来謎に包まれていた母タントラの起源を、チベット訳語のみ現存する最古の母タントラ『サマーヨーガ・タントラ』までたどり、解明することに成功している。第7章では、『時輪タントラ』が、父母両タントラの曼荼羅をどのように統合し、一大密教体系を構築したかを論じるとともに、その体系が時輪曼荼羅にいかにか反映しているかを詳論する。終章「インドにおける曼荼羅の展開とその思想的意義」は、論文全体を総括するとともに、曼荼羅を支える理論的な根拠として、「蘊・界・処」説や三十七菩提分法説などの伝統的な教理が援用されたことの意味を考察している。

第2部「文献篇」は、氏自身がネパールにおいて発見した『秘密集会』聖者流の『曼荼羅儀軌二十』と、ジニャーナパーダ流の『普賢成就法』という二つの重要文献の校訂テキストおよび訳注研究からなり、本論文のすぐれた貢献の一つとして特筆すべきである。

このように、本論文はインドにおける曼荼羅の成立と発展を詳論した初めての本格的な研究であり、今後の曼荼羅研究の道標ともなるべき画期的な業績として高く評価することができる。一部のテキスト解釈および訳語の統一等に関して問題は残されるが、本研究の画期的な意義を損なうものではない。

以上の理由により、審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしい業績であると判断する。